
鋼の錬金術師 天使との約束

影夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼の錬金術師 天使との約束

【Nコード】

N59790

【作者名】

影夜叉

【あらすじ】

ゲーム『翔べない天使』のその後を独自に考えてみました。

最後の戦いの後、エドはノイエヒースガルドに立ち寄って……。

(前書き)

プロフィールに、銀魂、ケロロ、ポケモンしかやらないみたいなの
と言って、なんでハガレン？

上手く出来たか分かりませんが、どうぞ！

最後の戦いから半年。

エドとアルは自分達の身体が元に戻ったことの報告と挨拶回りを分担して行っていた。

「あゝ今日の分は、終わりっ！と」

背伸びをし、エドはホームに入ってきた列車に乗った。

「アルの方は、終わったかな……」

独り言を言いながら座席に座り、窓の外を見た。

「ちょっと早えけど、帰るか」

ふと、見覚えのある景色が見えた。

まだ1年程しか立っていないのに、懐かしく思えた。

「ここ……ヒースガルド地方か……」

呟き、その地方にあるノイエヒースガルドでの出来事を思い出す。

「アルモニ……」

今は亡き少女の名が自然と出た。

「まだ……おまえやセレネ、教授に言ってなかったよな……」

エドは立ち上がり、次の停車駅であるノイエヒースガルドに降り立った。

「変わってないな。この辺は」

駅周辺は、以前と殆ど変わっていない。
が、以前よりも花の数がずっと増えている。

「えーっと、確か教会は…。あつちか」

教会へと続く道をエドは歩く。

あの時は、アル、そしてアルモニと一緒に走ったり、歩いたりした道だ。

立ち止まり、山を見た。

「…あるかな。あの花」

あの花……。

アルモニと最初に会った時、彼女が持っていたエーテルフラウのことだ。

白く細長い花弁を持ったあの花を持っていくと、エドは考えた。

(いや、この時期じゃもうねえかも……)

以前来た時と季節が違う。

もう無いかもしれない、と思いつつも、エドはエーテルフラウが生えていた湖畔へ向かった。

「ここも変わってないな」

草原と澄んだ湖、所々にある石柱。

その場も、以前と変わっていなかった。

エーテルフラウが無いことを除けば……。

「やっぱ……、もう無いか……」

それでもエドは諦めきれず、湖畔の周囲を探し回る。

もしかしたら、一輪だけでも残っているかもしれない、と思いつながら。

「……あつた！」

小さめだったが、一輪のエーテルフラウを見つけた。

「あと、もう一つ位ないか……」

エーテルフラウを摘み、再びエドは花を探した。

「無いな……」

倒木の上に座り、ため息を付く。

「仕方ねえ、違う花を持ってく……ん？」

視線の先に白い物が見え、その場に駆け寄る。

倒れた石柱の影に、エーテルフラウが咲いていた。

「あつた！しかも2つ！」

最初に見つけた花と同じ位の大きさのと、少し大きめの花があった。

「これで、教授とセレネ、アルモニに供えられるな」

エドは、摘んだエーテルフラワーを大切に持つと山を下り、3人の墓がある教会へ向かった。

「久しぶり。教授、セレネ。…アルモニ」

墓石に声を掛け、持っていたエーテルフラワーを供える。

小さい花をセレネに置き、大きい花をヴィルヘルムに置くようにして止める。

「悪い教授。ち、こっちで我慢してくれるか？」

そう言ってエドは、小さい花を置く。

「こっちは、アルモニにやりたいんだ」

エドは大きな花をアルモニに供えると、墓石の前に座る。

「…アルモニ。オレ達、目的が果たされた。アルは、元の身体からだに戻ったし、オレも右腕が戻った。…左足は戻さなかったけど」

エドは静かに話し始める。

「あの時、弟子にするか考えてやるって言ったけど、おまえはオレの……弟子だ。たった一人のな」

花が咲き乱れる教会を見る。

「この花も……おまえが錬成した花なんだろう？錬成は、失敗してた訳じゃなかったんだ。…ただ眠っていただけで」

1年程経っている為、あの時の花ではないと感じても、エドにはアルモニの種から咲いた花だと思えた。

「やっと咲かせられたな……。その大きな花は、ご褒美のつもりだ。本当に、よくやった……」

呟いた時、出来ればもう一度会いたい、もう一度話したい、と思った。

「オレ…、師匠らしいことなんて一つもしてなかった。もっと、おまえの為に何か出来た筈、ってずっと思ってた」

けど、と続けた。

「おまえがくれた手紙…、すげえ嬉しかった。こんなオレに、何度も『ありがとう』って言うってくれて」

右手で墓石に触れた。

「本当は、おまえの口から直接聞きたかったよ。ありがとうって…」

目を閉じると様々な感情と、アルモニとの思い出が溢れてくる。エドはしばらく、風の吹き抜ける墓地に座り込んでいた。

「じゃあ、そろそろ行くな。今度は、アルと一緒に来るから」
立ち上がり、言った。

「いや、せんせい師匠も一緒の方がいいな……」

少し考えて呟く。

ここには、セレネとヴィルヘルムもいるのだから、どうせなら3人で来た方がいいと思った。

「また来るからな！今度は、花一杯持って」

笑って言うのと、教会を後にし、歩き出す。

少し歩くと、やや強い風が後ろから吹き、振り返った。
すると、視線の先に3つの人影があった。

「あ……」

エドは目を見開いた。

ヴィルヘルムとセレネ、アルモニがそこに立っていたからだ。

ヴィルヘルムは、セレネとアルモニの肩に手を置き、穏やかな表情を浮かべている。

セレネは微笑みながら、小さく手を振り、アルモニは満面の笑みで大きく手を振っていた。

駆け出そうとした時、再び風が吹き、思わず目を閉じる。
目を開けると、3人の姿はなかった。

「教授、セレネ…アルモニ……」

3人がいた所を見つめる。

幸福そうに笑っていた3人は、ただの幻影かもしれない。それでも、エドはその場所に向かって大きく手を振った。

「せんせい師匠とアルの3人で、また来るからなーっ！！」

笑顔で言うと、エドは駅に向かって走り出した。

教会では、色とりどりの花びらが風に舞い続けていた。

(後書き)

最後まで読んでくれた方、ありがとうございます！

中途半端な話だったかもしれないですが、いかがだったでしょうか？

多分、ハガレンはもう書かないと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5979o/>

鋼の錬金術師 天使との約束

2011年1月16日02時19分発行